

# 『ライ麦畑でつかまえて』における「心の読みすぎ」

持 留 浩 二

〔抄 録〕

発達心理学の概念である「心の理論」をめぐる様々な現象の中に「心の読みすぎ」という現象がある。本稿では、この「心の読みすぎ」という現象に焦点を当て、サリンジャーの代表作『ライ麦畑でつかまえて』における、ホールデンと彼の恩師アントリーニとのやりとりを解釈している。この場面では、語り手ホールデンによる語りの内容にかなりの混乱が見られ、そこで何が起こったのかについて批評家の間で意見が大きく二つに割れている。そこではホールデンとアントリーニの間で様々な誤解が起こるのであるが、その原因は互いが互いの心的状態を推測する際に、自分しか知らない事実を他者も知っている前提で、他者の心的状態を推測する「心の読みすぎ」という過ちを犯してしまっていることにある。本稿では、登場人物たちの「心の読みすぎ」に加え、この場面を解釈している批評家たちの「心の読みすぎ」にも言及し、それらを踏まえた上で、ホールデンとアントリーニのやりとりについて独自の解釈を行っている。

**キーワード** 『ライ麦畑でつかまえて』、アントリーニ、心の理論、心の読みすぎ

## 序論

発達心理学の大きな発見である「心の理論」(“Theory of Mind”)が様々な学問分野に与えた影響は大きい。「心の理論」とは、他者が考えていることや感じていることを推測するために必要とされる機能である。文学においてもそれは無視できない概念で、我々が文学作品を読む際に「心の理論」は大きな役割を果たしている。「心の理論」はワーキングメモリや実行機能といった機能と連携して機能しており、ワーキングメモリや実行機能に問題がある人は、容易に他者の心を読み違えてしまう。特に、実行機能がうまく働かないと、自分しか知らない事実を他者も知っている前提で、他者の心的状態を推測する、いわゆる「心の読みすぎ」という現象が起こってしまい、これは他者とのコミュニケーションにおいて大きな障害となってしまう。

本稿では、まず「心の理論」とワーキングメモリや実行機能との関係、そして「心の読みすぎ」がどのようにして起こるのかを簡潔に説明している。そしてJ・D・サリンジャー(J. D. Salinger)の代表作『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*)をとり上げ、その中でも登場人物同士の誤解が興味深く顕著に描かれている、主人公ホールデン・コールフィールドと彼が以前通っていた高校の教師であるアントリーニとのやりとりに注目し、そこに「心の読みすぎ」現象が見られることを明らかにしたい。この場面では、物語の語り手である主人公ホールデンが語る内容にかなりの混乱が見られるのだが、その混乱した内容ゆえに、実際にそこで何が起こったのかについては不明な点が多く、批評家の間でもその解釈が大きく二つに割れている。本稿では、様々な批評家たちによる作品の捉え方の中にも「心の読みすぎ」が見られることを明らかにしたい。そして最後に、ホールデンとアントリーニのやりとりをめぐる様々な「心の読みすぎ」現象を指摘した上で、この場面をどう理解するべきなのかについて、自分なりの解釈を示したい。

## I 心の理論

人が、他人の考えていることや感じていることを推測することが出来るのは「心の理論」の機能が脳の中に組み込まれているからである。この考えはもともとデイヴィッド・プレマック(David Premack)とガイ・ウッドルフ(Guy Woodruff)が提唱した考えで<sup>(1)</sup>、発達心理学における大きな発見として、現在も様々な分野に広く影響を与えている。文学にとっても、この考えは無視することの出来ないものである。なぜなら、文学を読むという行為自体が「心の理論」の機能なくしてはありえないからである。我々が、小説を読んでいる時に、その中に出てくる登場人物の考えていることや感じていることを読み取ることが出来るのは、我々の頭の中で「心の理論」が正常に機能しているからなのだ。

「心の理論」の機能は、当初はモジュール的なものであると考えられていた。モジュールとは、それぞれが個別の問題を解決するために独立して機能している小さなマシンのようなものである。例えば、人の顔を認識する機能は一つのモジュールだと言われている。人の顔を見てそれが誰の顔であるかを識別する際、我々はその人の顔の形、目の形、あるいは口の形を個別に見て、その形状をもとにしてそれが誰の顔であるのかを総合的に判断しているわけではない。顔を識別するための特別なモジュールがあるのだ。その機能を司っている脳の部位を事故等で損傷した人は、物の形状はきちんと識別できるのだが、人の顔に関してはどれも同じようにしか見えなくなるという症状に陥ることがある。脳の中で、物の形状を認識する機能と人の顔を認識する機能がそれぞれ独立したモジュールで、それぞれが脳の別々の部位にあるからだ。

「心の理論」は最初はモジュール的な機能だと考えられていたのであるが、その後その考えを修正せざるを得なくなる。前原由喜夫は「1990年代の後半から、ワーキングメモリや実行機

能といった、心を読む能力専用ではない、汎用的な認知的情報処理システムが心の理論の発達に大きく関与していることを示す研究が蓄積されるようになってきた」と指摘している<sup>(2)</sup>。

## II ワーキングメモリと実行機能と「心の読みすぎ」

ワーキングメモリとは、前原によると「現在進行中の課題に必要な情報を頭の中に一時的に保存して、その情報をいつでも利用できる状態に「活性化」しておく短期記憶システム」である<sup>(3)</sup>。これは「作業記憶」と日本語訳されることもあるが、脳の中で様々な情報処理をする際に必要とされる機能である。

例えば、小説を読む際にもワーキングメモリは大きな役割を果たしている。物語の筋を追いつけるためには、物語における時間的な前後関係や空間的な位置関係を常に頭の中に保持する必要があるし、登場人物同士の関係性を正しく把握し続けるためには、語り手を含むそれぞれの登場人物が話す内容のうちどこまでが客観的な描写でどこからが主観的な印象なのか、そしてその主観的な印象は信用できる内容なのかどうかを正確に把握しておく必要がある。そのためにはワーキングメモリの機能は不可欠で、ワーキングメモリの機能が弱いと、複雑な物語を前にしてたやすく迷子になってしまう。

次に、実行機能についてであるが、前原は以下のようにまとめている。「実行機能とは目標志向行動を実現するための認知機能の総称であり、優勢反応の抑制や注意の柔軟な切り替えといった複数の下位プロセスから構成されている。その中でも「思わずやっしまいそうになる」反応を抑える能力、すなわち優勢反応抑制は最も重要な下位プロセスだと考えられてきた<sup>(4)</sup>。

「心の理論」とは、他者が考えていることや感じていることを推測するために必要な機能であるが、他者が考えていることや感じていることを推測するためには、完全にその他者の立場に立つ必要がある。つまり自分の心的状態と他者の心的状態をうまく切り替える必要があるのだ。しかし普段は自分の心的状態の方が、その利用可能性が高いために、他者の心的状態よりも強く活性化されている。それで、自分の心的状態に固執してしまい、他者の心的状態にうまく切り替えることが困難になるという現象がしばしば起こってしまう。他者の心的状態を正しく推測するためには、自分の心的状態の活性化を抑制する必要がある。それこそが優勢反応抑制、つまり実行機能の役割である。

この実行機能がうまく働かなければ、自分しか知らない事実を他者も知っている前提で、他者の心的状態を推測することになってしまう。その結果、完全に他者の心的状態を読み違えてしまうことになる。自分の知識が他者の心的状態の推測を歪めてしまう数々の現象は「知識の呪縛」(“Curse of Knowledge”)と総称されているが、前原は「知らず知らずのうちに自分の心の状態を極端なほど相手に投影してしまい、『あなたの心は分かりきっている』と思いついで

いる状態」のことを「心の読みすぎ」と名付け、これこそが他者とのコミュニケーションにおける大きな落とし穴だと指摘している<sup>(5)</sup>。

### III アントリーニとホールデン

『ライ麦畑』は、主人公ホールデン・コールフィールドによる一人称の語りによる物語である。物語の内容は、プレップスクールであるペンシー校を成績不良のために退学になってしまったホールデンが、ニューヨークの街を放浪しながら様々な人々と会い、最終的にある種のカタルシスへと至るものとなっている。ホールデンによる一人称の語りには、いわゆる「信用できない語り手」問題が顕著な形で見られる。ホールデンはまだ高校生で、しかも精神的にかなり不安定な状態にあるため、彼の語りには信用できない描写が含まれているのだ。そこには前川の言う「心の読みすぎ」現象が見られる。

本稿で注目したいのは、物語終盤での、ホールデンが以前に通っていたエルクトン・ヒルズという高校の先生だったアントリーニとホールデンとのやりとりである。その場面において、登場人物たちに「心の読みすぎ」が見られること、さらにはこの場面を解釈している批評家たちにも「心の読みすぎ」が見られることを明らかにしたい。まずは問題となるその場면을説明したい。

ペンシー校を退学になり、自宅に帰るまでの間しばらくニューヨークを放浪するものの、最愛の妹フィービー以外に疲弊した彼の心を理解してくれる人は誰一人見つからず、しかも手持ちのお金が無くなり泊まる場所がなくなった時に、ホールデンは以前お世話になったアントリーニのもとを訪ねようとする。電話をするとアントリーニは、来たかったらすぐに来てと言ってくれる。

ホールデンにとって、アントリーニは今まで接した様々な先生の中で一番良い先生だった。かなり若いのが、一緒に冗談を言い合っても敬意を失うことのない人だった。ホールデンがエルクトン・ヒルズの生徒だった頃、クラスメイトのジェームズ・キャッスルという名の少年が、同級生からの執拗ないじめに遭い飛び降り自殺をした。その血だらけのジェームズ・キャッスルを最初に抱き上げたのがアントリーニだった。ジェームズ・キャッスルに自分の上着をかぶせ、診療室まで運んで行ったのだ。上着が血だらけになろうが、アントリーニは全く気にする様子を見せなかった。彼はホールデンが信用できる数少ない大人の一人だった。だからこの時もアントリーニの厚意に甘え、真夜中であつたにもかかわらずアントリーニのアパートに向かったのだ。

アントリーニは、自宅を訪れたホールデンを見て、彼が今まさに人生の重大な岐路にいて、かなり危うい状況にあることを察したアントリーニは、率直に自分が考えていることをホールデンに話す。彼は極めて的確にホールデンが抱えている問題を指摘している。

“I have a feeling that you’re riding for some kind of a terrible, terrible fall. But I don’t honestly know what kind... Are you listening to me?”

“Yes.”

You could tell he was trying to concentrate and all.

“It may be the kind where, at the age of thirty, you sit in some bar hating everybody who comes in looking as if he might have played football in college.”<sup>(6)</sup>

「君は今、とんでもない墮落に向かっているんじゃないかと、そういう気がするんだ。正直に言ってどんな墮落なのかは……おい、私の話を聞いているのか？」

「はい」。

先生が集中やなんかをしようとしてるのは分かるんだ。

「それは、君が30歳になった時に、どこかのバーで席について、その店に入ってくる客で、大学時代にフットボールをやったような奴を目にする度に、憎しみを感じるといった、そんな墮落かもしれない」。

このアントリーニの指摘はかなりの的確である。すでにその墮落は始まっている。ストラドレイター、アル・パイク、そしてサリーの知り合いのアイヴィーリーグの男への嫌悪にそれはよく表れている。ストラドレイターはホールデンのルームメイトで、マッチョでハンサムなバスケットボールの選手だ。彼は女の子たちから人気があり、ホールデンが好意を抱いているジェーン・ギャラハーとデートをしている。それがもとでホールデンは彼と殴り合いのケンカをしている<sup>(7)</sup>。アル・パイクもマッチョなスポーツマンで、かつてジェーンとデートをしていたが、ホールデンは彼のことを「オール筋肉で脳みそはゼロ」(“All muscles and no brains”)だと言い、嫌悪感を露わにしている<sup>(8)</sup>。サリーの知り合いのアイヴィーリーグの男についても同じで、デート中にサリーがその男の話題を持ち出しただけで、ホールデンはひどい嫌悪感を感じ、サリーを罵倒してしまう<sup>(9)</sup>。落ちこぼれのホールデンは、社会でうまく適応している若者に対してひどい嫌悪感を持っているのだ。

そして『ライ麦畑』の中でもかなり重要な場面、ウィルヘルム・シュテーケルの言葉を引用しながらアントリーニがホールデンにアドバイスをする場面を以下に引用したい。

It was written by a psychoanalyst named Wilhelm Stekel. Here’s what he—Are you still with me?”

“Yes, sure I am.”

“Here’s what he said: “The mark of the immature man is that he wants to die nobly for a cause, while the mark of the mature man is that he wants to live humbly for one.””

He leaned over and handed it to me. I read it right when he gave it to me, and then

I thanked him and all and put it in my pocket. It was nice of him to go to all that trouble. It really was. The thing was, though, I didn't feel much like concentrating. Boy, I felt so damn *tired* all of a sudden.<sup>(10)</sup>

「それは精神分析医のウィルヘルム・シュテーケルの言葉なんだ。彼が言ったのは——おい、聞いているのか？」

「はい、聞いてます」。

「こう言ったんだ『未成熟な人間の特徴は、理想のために気高い死を選ぼうとする点にあり、成熟した人間の特徴は、理想のために卑小な生を選ぼうとする点にある』」。

先生は身を乗り出して僕にその言葉が書かれた紙を渡した。それをもらってすぐに僕はその言葉を読んだ。それからお礼やなんかを言うと、ポケットにしまった。そんなことまでしてくれるなんて、いい人なんだと思った。本当にそうだよ。でも困ったことに、僕は集中する気にならなかったんだ。なんだか突然とてつもない疲れを感じたんだ。

ホールデンはアントリーニの家で、たまった疲れを感じ、気がつくとも眠ってしまっていた。そして真夜中に目を覚ます。この場面が、批評家の間で解釈が大きく二つに分かれた、物議を呼んだ場面だ。語り手ホールデンによると、それは、同性愛者で少年好きなアントリーニが、ホールデンに性的な行為をしようとした場面だ。そこで起きたことの詳細は以下のとおりである。

真夜中に、頭に何かに触れるのを感じたホールデンは目を覚ました。それはアントリーニの手だった。アントリーニは、真っ暗闇の中、ホールデンに言わせると「彼は僕の頭をいやらしく触る(petting)というか、なでる(patting)というか、そんなことをしていた」。ホールデンに何をしてたのか聞かれたアントリーニは「何もしていない！ただそこに座って、見とれていたんだ(admiring)……」<sup>(11)</sup>と言う。

完全に動揺してしまったホールデンは、慌てて服を着替えてその場を去ろうとする。そこで不意に昔の記憶がよみがえる。彼は以前に何度も同性愛の変質者に遭遇したことがあったのだ。「僕がいる時に限って、奴らは決まって変質者みたいなことをするんだ」<sup>(12)</sup>。「どこへ行くんだ？」と言うアントリーニを見て、ホールデンは彼の気持ちを推察している「先生は普段通りに冷静に振舞おうとしているんだけど、全然冷静なんかじゃないのが分かるんだ」<sup>(13)</sup>。

ホールデンはアントリーニのアパートから出て行こうとするが、アントリーニは彼を引き留めようとする。そんなアントリーニを振り切って出ていくホールデンに向かってアントリーニは、二度目の「ホントに、ホントに変わった子だな」という言葉を口にする。その言葉を聞いてホールデンは、「変わった子だって？ 恥知らずめ」と思う<sup>(14)</sup>。

出て行こうとするホールデンに、荷物を取ったらすぐにここに戻ってくるようにとアントリーニは言う。ホールデンは以下のようにその時の心境を語っている。

Boy, I was shaking like a madman. I was sweating, too. When something perverted like that happens, I start sweating like a bastard. That kind of stuff's happened to me about twenty times since I was a kid. I can't stand it. <sup>(15)</sup>

驚いたことに、体がキチガイみたいに震えていたんだ。汗もひどかった。そんな変質行為が起こる時は、とんでもなく汗が出てくるんだ。あんなことは、子供のころから何度も経験しているんだ。もう耐えられないよ。

#### IV アントリーニは同性愛の変質者なのか？

アントリーニが性的な行為をしようとしたのかどうかに関しては、批評家の間でも意見が分かれているが、どちらかというところ、彼の行為は性的なものであったと考える批評家が多い。エバーハート・オルセン(Eberhard Alsen)は「アントリーニがホールデンの頭をなでることにより、自らの性的趣向を見せてしまった時、ホールデンは一時的にその場から逃げてしまったのだが、彼はアントリーニを、インチキ野郎ではなく思いやりある人物と認めている」と指摘している<sup>(16)</sup>。アントリーニの行為は性的なものであったが、それと彼の人間性とは別なのだという主張だ。ジェームズ・ブライアン(James Bryan)は「アントリーニはずっと酒を飲み続け、彼が提供した静けさを台無しにしてしまっている(ホールデンはこの場面で初めて眠気を覚えているというのに)、そしてためらいがちに、同性愛的な行為に及んで、この少年を起こしてしまうのだ」と言っている<sup>(17)</sup>。

これらとは反対に、グレゴリー・ハッチンソン(Gregory Hutchinson)は「アントリーニが本当にホモセクシャルかどうかという問題は、私には議論の余地のある問題のように思える」と言っている<sup>(18)</sup>。その根拠として、アントリーニを同性愛の変質者だと思って彼のアパートを飛び出したホールデンが、後になってその判断を後悔していることを挙げている。

さらに、批評家の中には、問題となったアントリーニの行為が同性愛的なものなのかどうかを問うこと自体に疑問を抱く者も多い。サンフォード・ピンスカー(Sanford Pinsker)は以下のように言っている。

……アントリーニ先生は、ひどく混乱しているこの若者に対して、思いやりや自分自身との同一視の感情を強く抱いている。それを考えると、彼がホールデンの頭をなでることは、それほど不自然な、あるいは変質者的なことなのだろうか？

同時に、アントリーニ先生が、アガペーの愛とエロスの愛、つまりホールデンを単になでる行為といやらしくなでる行為の境界を越えてしまったという可能性も否定できない。ここでもまたサリンジャーは、両方の可能性を許容している。<sup>(19)</sup>

この問題については、実は白黒つけることが出来るほど十分な描写が作品内に見られない。ピンスカーの指摘はもっともなように思われる。

## V アントリーニの助言をめぐる様々な意見

ではアントリーニが引用したシュテケルの言葉、「未成熟な人間の特徴は、理想のために気高い死を選ぼうとする点にあり、成熟した人間の特徴は、理想のために卑小な生を選ぼうとする点にある」についてはどうだろう。この言葉は、多くの批評家たちが価値を認めている言葉であるが、実際にホールデンが自分の問題を解決する上で役に立ったのだろうか？

高橋美穂子は、サリンジャー文学においては、X軍曹、フラニー、そしてバディといった主人公たちが苦悩を解決し、心の安らぎを得た証として眠りや眠気が使われていることを指摘した上で、「ホールデンの眠気も同様である。彼は意識してはいないが、内心アントリーニの言葉に感じるところがあったのだ。だから、つかのまであるにせよ安らぎを得て、急に眠気をおぼえるのである」と指摘している<sup>(20)</sup>。

クリントン・W・トロブリッジ(Clinton W. Trowbridge)も、「シュテケルから引用することにより、彼(アントリーニ)はホールデンが成熟へ向かうよう促した。そして、より現実的で、より自分本位ではない理想主義へと向かうよう促したのだ」とシュテケルの言葉がホールデンにとって救いをもたらしたのだと主張している<sup>(21)</sup>。

これらの意見とは反対に、アントリーニの助言がホールデンには何の役にも立たなかったと主張する批評家もいる。新田玲子は「先生がとくとくと〈成熟〉を説くとき、行為者ホールデンが突然関心を失って眠気を覚えてしまうのも、先生の提案に心安らぐ真の解決が見出せなかったことを示唆している」と指摘している<sup>(22)</sup>。ここで興味深いのは、先ほどの高橋の「心の安らぎを得た証」としての眠気とは真逆の、「心安らぐ真の解決が見出せなかったこと」を示す眠気という解釈がとられている点である。野間正二も「ホールデンがアントリーニ先生に求めていたものは、その実態は、助言などではなく、自分を無条件に迎え入れてくれる愛であった」と指摘し、ホールデンを救う上で、アントリーニの助言は役に立たなかったと主張している<sup>(23)</sup>。

サリンジャー研究の第一人者ウォーレン・フレンチ(Warren French)もまた、アントリーニの助言はホールデンを救う上で助けとはならなかったと主張する。

彼(アントリーニ)は、この墮落の苦しみからホールデンを救おうと、彼を説得しようとする。しかし、もし子供たちが「金の輪をつかもうとするならば、そうさせるしかないんだ……彼らに何かを言っちゃいけないんだ」とホールデンが言った時、彼は最終的にアントリーニへの返事となるような言葉を見つけたのだ。人は自分自身で人生について学ばね

ばならない。……『ライ麦畑でつかまえて』は説得によっては救われない男の物語なのである。<sup>(24)</sup>

## VI 『ライ麦畑でつかまえて』における「心の読みすぎ」

では、批評家の意見が分かれているこれらアントリーニの言動をどう解釈すればいいのだろうか。本稿のテーマである「心の読みすぎ」という現象を手掛かりにしてアントリーニの言動を明らかにしたい。まずはアントリーニの同性愛的な行為について考えてみたい。

アントリーニが同性愛的な行為に及んでいたということを示す根拠となる事実は、夜中にホールデンが目を覚ました時にアントリーニが彼の頭をなでていたということ、ホールデンが眠りにつく前にアントリーニが言った「おやすみ、イケメン君」(“Good night, handsome”)という言葉<sup>(25)</sup>、そしてホールデンが目覚めた時にアントリーニが口にした「(ホールデンのことを)見とれていた」(“admiring”)と言う言葉である<sup>(26)</sup>。この三か所以外には、アントリーニが性的な行為をしようとしていたことを示す描写はない。例えば、以前からアントリーニには、同性愛者である噂があったとか、エルクトン・ヒルズで男子生徒にいかがわしい行為をしていたという噂があったとか、アントリーニと二人でいる時に彼がホールデンに対して性的興味のようなものを抱いていた気がするなどといった描写は一切見られないのだ。それにもかかわらず、ホールデンは、アントリーニの「頭をなでる」という一回きりの行為から、完全にアントリーニが性的な行為をしようとしていたと断定している。

また、ホールデンがこの時にアントリーニを変質者扱いした理由の一つが、これまでにホールデン自身が何度もそういう目に遭ってきたというものだ。今まで何度もそういう目に遭ってきたので、自分には、相手がそういう意図を持っているかどうかを判断することができるのではないのだろうか、それまで全くホールデンに対して性的な興味を示すそぶりを見せたことのないアントリーニの行為を見て、彼もまたそういう変質者の一人だと判断するのは論理の飛躍である。もしかするとホールデンは、そういう性的被害がトラウマになっていて、相手に全くそのような気がないのに、ちょっとした紛らわしい行為から相手を同性愛の変質者であると判断してしまう一種のPTSDのような症状に陥っていたのかもしれない。性的被害を受けたことのある人にありがちなように、そういった行為に過度に敏感になっていた可能性がある。

ここには前川の言う「心の読みすぎ」という現象が見られるのではないだろうか。過去に自分の身に起こった性的被害という経験にもとづいてホールデンはアントリーニの行為を解釈している。もしアントリーニが、ホールデンがかつて経験した性的被害を知っていたならば、ホールデンの体に触れることに慎重になっていたかもしれない。しかしアントリーニはホールデンがそのようなトラウマを抱えていることを知らなかった。それゆえにアントリーニは自分の行為がそのような受け取られ方をするとは思ってもいなかったのだ。ホールデンは自分しか知

らない事実を当然相手も知っているものと考え、相手の心的状態を勝手に推測している。これは「心の読みすぎ」に当たるのではないかと考えられる。

では仮に、アントリーニに性的な意図があったと仮定しよう。そうすると、彼の言動につじつまの合わない奇妙な点があることに気づく。アントリーニはホールデンに向かって「イケメン君」とか「(ホールデンに) 見とれていた」という言葉を、全く隠そうとはしないで使っている。特に「見とれていた」という言葉に関しては、夜中に目覚めたホールデンがアントリーニの行為にひどくうろたえていた時に発せられている。もしアントリーニが、自らの行為を良からぬことと自覚していたのであれば、その行為にひどくうろたえているホールデンに対して、彼をさらに動揺させるであろう「見とれていた」などという言葉を使うだろうか？ もっと誤解されないような言葉を使って自分自身の潔白を示そうとするのではないだろうか。ひどくうろたえているホールデンに向かって、誤解を招きかねない「見とれていた」という言葉をわざわざ使ったということは、逆に、アントリーニが、自分が良からぬことをしていたとは全く自覚していなかったことを意味しているように私には思われる。

これまで見てきたように、ホールデンが、アントリーニのまぎらわしい行為を同性愛的なものとして受け取った背景には、ホールデンの「心の読みすぎ」現象が関係している可能性を指摘したい。彼は、それまでに何度も経験した同性愛的な被害のトラウマゆえに、性的な意図のないアントリーニの行為に過敏な反応をしてしまったのである。それゆえホールデンは、アントリーニの家から逃げ出した後、自分の判断が誤っていたのではないかと疑問を持ち始めたのだ。

But what *did* worry me was the part about how I'd woke up and found him patting me on the head and all. I mean I wondered if just maybe I was wrong about thinking he was making a flitty pass at me. I wondered if maybe he just liked to pat guys on the head when they're asleep. I mean how can you tell about that stuff for sure? You can't.

(27)

本当に心配になったことは、僕が目覚めた時に先生が僕の頭をなでたりなんかしてた時のことなんだ。つまりもしかすると、先生が僕に対してホモ行為をしようとしてたっていう考えは間違っていたかもしれないって思ったんだ。もしかすると、先生はただ単に眠っている人の頭をなでるのが好きなだけかもしれない。そういうことって確実に判断できないじゃないか？ 無理だよ。

次に、アントリーニの助言について考えてみたい。まず「未成熟な人間の特徴は、理想のために気高い死を選ぼうとする点にあり、成熟した人間の特徴は、理想のために卑小な生を選ぼうとする点にある」というシュテークルの言葉によってホールデンが救われたという考えには説得力がある。ホールデンはこの時まで「気高い死」を選ぼうとしていた。何の計画もなく、

一人で西部に行っておしとして誰とも話さずにひっそりと暮らそうと考えていた。しかし、裕福な家庭に生まれ、これまで何不自由なく都会で快適に暮らしてきたホールデンにそんなことができるわけがない。そんな生き方を選ぼうとすれば、惨めな最期、つまり「気高い死」が待ち受けているだけだ。しかしホールデンは最終的に「気高い死」を選ぶことはしなかった。彼は一人西部へ向かう計画をあきらめ、「卑小な生」を選んだのだ。つまり結果的にはアントリーニの言葉通りになったわけである。そう考えると、ホールデンがアントリーニの言葉に救われたと考えるのはまっとうな考えである。

しかしフレンチは「この小説の中に、自分の姿を読み込みすぎる多くの人々は、ホールデンが求めているものは、賞賛ではなく、困難な時期を乗り越える上で助けとなってくれる理解であることに気づいていない」とこの解釈に真っ向から反論する<sup>(28)</sup>。フレンチによると、読者の多くはこの小説に自分の姿を読み込みすぎるという過ちを犯してしまっているというのだ。言い換えると、「心を読みすぎた」読者たちが、自分たちが求めているものと、作品中のホールデンが求めているものを混同し、その結果読者自身が求めているものを、当然ホールデンも求めているものと思っ込んでしまっているということになる。アントリーニの助言がホールデンを救ったと考える読者の多くは、アントリーニが引用した示唆に富んだシュテークルの言葉に感銘を受けた人たちだろう。彼らは当然ホールデンも自分たちと同じように、シュテークルの言葉から感銘を受けたはずだと考える。つまり彼らは「心の読みすぎ」により、ホールデンの心的状態に、自らの心的状態を読み込んでしまうのだ。

## VII ホールデンはアントリーニの助言に救われたのか？

では、フレンチの言うように、アントリーニが引用したシュテークルの言葉は本当にホールデンに訴えなかったのだろうか。確かに、フレンチの主張、つまりシュテークルの言葉がホールデンを救ったと考える読者の多くが、作品の中に自らの姿を読み込みすぎているという主張には説得力がある。しかし『ライ麦畑』のエンディングを見た時、そこに描かれているホールデンが「気高い死」ではなく「卑小な生」を選んだという印象は、そう簡単にはぬぐい去ることはできない。

フレンチは、ホールデンが求めていたのは理解であると言う。しかし理解されるだけで問題解決に至るだろうか。ホールデンは、いかに生きるべきかという大きな問題を抱え込んでいる。問題を解決するためには、その問題の本質はどこにあるのか、どう対処すべきなのかを明らかにする必要がある。アントリーニの助言は、ホールデンの問題を解決するための十分な洞察を備えていたと私は考える。そこで、ホールデンはアントリーニの助言には救われなかったとするフレンチの意見に反論したい。

フレンチは、ホールデンは助言ではなく理解を求めていたのだと主張していたが、確かにア

ントリーニが必死で助言していた時、ホールデンは、「でも困ったことに、僕は集中する気にならなかったんだ。なんだか突然とてつもない疲れを感じたんだ」(“I didn’t feel much like concentrating. Boy, I felt so damn *tired* all of a sudden.”)というように極度の疲労と眠気の真ただ中において、その言葉をぼんやりとしか聞いていなかった。しかし疲れていたから「集中できなかった」ということであればまだ理解できるが、「集中する気にならなかった」(“I didn’t feel much like concentrating.”)というのは奇妙な感じがする。そこには集中したくないという彼の意志が垣間見える。「集中したくてもできなかった」わけではなく、「集中しなかった」のだ。

ここに、アントリーニに対するホールデンの反発が見て取れる。そしてその反発は、アントリーニに、自分の真の姿を見抜かれたところから来ているものではないだろうか。何一つうまく行かない、はみ出し者である彼が、女の子にモテるハンサムなスポーツマンや高学歴のエリートを恨んでいること、さらに自尊心が強すぎるため、そんな惨めな自分の状況を変えようとすることもせず、ただ破滅的な方向へ向かおうとしていることをアントリーニは見抜いていた。ホールデンも自分に問題があることをアントリーニに見抜かれていることに気づいたはずだ。それでそんなアントリーニに反発したのではないだろうか。

これと同じような、ホールデンが、自分に問題があることを感じさせる相手に反発する態度は、サリーとデートをする場面でも見られる。二人は劇場でサリーが好きな俳優が出ている劇を見るのであるが、幕間にしばらくの休憩がある。その休憩時間を二人は劇場のロビーで過ごす。周りには俳優がいたり、お金持ちのセレブがいたりして、そういう派手な世界にあこがれているサリーはわくわくしている。そんな華やかな人々の中にサリーは知り合いの姿を見つける。

Then all of a sudden, she saw some jerk she knew on the other side of the lobby. Some guy in one of those very dark gray flannel suits and one of those checkered vests. Strictly Ivy League. Big deal.... Old Sally kept saying, “I *know* that boy from somewhere.”... She kept saying that till I got bored as hell, and I said to her, “Why don’t you go on over and give him a big soul kiss, if you know him? He’ll enjoy it.” She got sore when I said that.... His name was George something—I don’t even remember—and he went to Andover. Big, big deal. <sup>(29)</sup>

その時突然、彼女はロビーの向こう側に、ある知り合いの間抜け野郎を見つけたんだ。奴は、いかにもって感じのとても濃いダークグレーのフランネルのスーツと、チェックのベストを身に着けていた。完全にアイヴィーリーグって感じだった。大したもんさ。……サリーの奴は「あの人どこかで会ったことあるわ」と何度も言った。……あまりに何度も言うもんで、かなりムカついてきて言ってやったんだ「奴と知り合いなら、向こうまで行っ

てきて熱烈なディープキスでもしてやればいいじゃないか。奴も喜ぶだろうし」ってね。そう言うと彼女怒ったね。……奴の名前はジョージ何とかって言うんだけど、覚えてないんだ、奴はアンドーヴァーに行ってたんだ。全く大したもんだよ。

アンドーヴァーとは、アメリカ最古の高校、フィリップス・アカデミーのことで、間違いなくこのサリーの知り合いの男はアイヴィーリーグに通うエリートだ<sup>(30)</sup>。落ちこぼれで、高校を退学してしまったばかりのホールデンにとっては妬みの対象以外の何ものでもない。憤ったホールデンは、サリーに「向こうまで行ってきて熱烈なディープキスでもしてやればいいじゃないか」とひどい言葉を吐いている。

この場面からも分かるように、ホールデンは精神的に未熟で、うまく社会に適応している人を目の前にした時の相手に対する嫌悪感が強すぎる。それでサリーの言葉もアントリーニの助言も、素直に受け取ることが出来ない。ホールデンが抱えている問題を的確に指摘しているように見えるアントリーニによる貴重な助言も、ホールデンにとっては耳の痛い話でしかなく、彼はその言葉に反発してしまうのである。それでホールデンは、サリーからの理解を得られないと感じた時に、まるでサリーのことなど最初から鼻にもかけていなかったかのようなひどい言葉を吐いたのと同じような態度を、アントリーニにも見せたのではないだろうか。彼は、アントリーニはただの変質者で、自分が理解を求めべき偉大な教師でも何でもなかったと相手を全否定するのである。彼はこういう行動パターンを繰り返しているように思える。まず相手に自分に対する無条件の理解を求め、それが得られないと、相手をとことん否定する。そうすることによって崩れかけている自尊心を何とか必死で保っているのである。

ではそんなホールデンに対してアントリーニは何をするべきだったのだろうか。フレンチは、アントリーニは、自分が大切だと考えるものではなく、ホールデンが求めているものを与えてやるべきだったのだと言う。つまりアントリーニもまた「心の読みすぎ」の過ちを犯しており、自分の知識に基づいて相手の心を読んでいたのだ。その結果彼は完全にホールデンが求めているものを読み違えてしまった。フレンチは以下のように続ける。

重要なことは、彼が、深刻な判断の誤りという罪を犯してしまったことである。というのは、もし彼がこの少年が極度に不安な状態にあることが分かっていたら、この少年を苦しめたり、動揺させたりする可能性のあることをすることはなかっただろう。アントリーニの家にたどり着くまでに、彼はほぼ限界に達していた。<sup>(31)</sup>

フレンチは、「もしアントリーニが本当に他人のことに敏感であれば、ホールデンの危険信号に気づいていたはずで、その危機的状態が過ぎ去るまでこの少年を完全にそっとしておいただろう」と言う<sup>(32)</sup>。

さらにフレンチは「未熟な人間の特徴は、理想のために気高い死を選ぼうとする点にある。これに反して、成熟した人間の特徴は、理想のために卑小な生を選ぼうとする点にある」というシュテューケルの言葉についても、その助言の効果について疑問を呈している「多くの読者が、アントリーニがホールデンに話したことに賛同し、賞賛している。しかし、だからといって、サリンジャーもそうであるとは言えない」<sup>(33)</sup>。

つまりフレンチはアントリーニの言葉は、確かに多くの読者に訴えたかもしれないが、作者のサリンジャー自身には訴えなかったのではないかと興味深い指摘をしているのだ。ではフレンチは何を根拠にして、アントリーニの言葉がサリンジャーには訴えなかったと考えるのだろうか。彼は次のように指摘する。

初期の作品を、それより後に書かれた作品から解釈することは危険なことであるが、サリンジャーがアントリーニをどう考えていたのかを考える際に、この作家の後の作品の多くが、シーモア・グラスを賛美することに力を費やしていることを少なくとも思い出すべきである。シーモアは卑小な生を選ばず、派手な死を選んだのだ……。<sup>(34)</sup>

このフレンチの指摘には反論する余地がある。まずある作品をのちの作品から解釈するのは確かに危険だ。もちろん危険だが、やってはいけないことではない。このフレンチの解釈も、一見もっとものように思えるが、後の作品から解釈するのであれば、もっと包括的な視点から彼の作品群を解釈すべきだ。確かに派手な死を遂げたシーモアは、サリンジャーが後期の作品すべての中で賛美し続けた人物だ。ただサリンジャー自身がそういう生き方を良しとしたのかという疑問が残る。我々は英雄を賛美するが、英雄のように生きようとは思わない。英雄的な死を遂げるよりも、平凡であっても長く平穏な人生を選んでいる。サリンジャーも同じで、シーモアは英雄的な人物だが、シーモアが英雄視され続ける後期の作品の中で語り手として登場するバディーの方が、実はサリンジャー自身に近い存在である。バディーはサリンジャーが自ら認める、自身の分身なのだ。

『ライ麦畑』の大ヒット後に書かれた一連のグラス家の人々を描いた作品群、いわゆる「グラス・サーガ」の一つ「大工よ、屋根の梁を高く上げよ」(“Raise High the Roof Beam, Carpenters”)の中で、バディーは1919年生まれだと書かれているが、サリンジャーが生まれたのも1919年である。バディーは作家で、人里離れたほとんど周りに人がいない森の中の電話もない小屋で生活しているのだが、サリンジャーもコーニッシュの田舎で隠遁生活を続けた。そして何よりも、バディーはそれまでサリンジャーが書いた「テディ」(“Teddy”)、「バナナフィッシュにうってつけの日」(“A Perfect Day for Bananafish”)、そして「大工よ」といった作品を書いたのは自分であると「シーモア序章」(“Seymour: An Introduction”)という作品の中で語っている<sup>(35)</sup>。つまり語り手のバディーは、自分が作者サリンジャーの分身であると自ら宣

言しているわけである。

フレンチの指摘に対してはこう反論できるのではないだろうか。サリンジャーはやはり「気高い死」ではなく「卑小な生」を選んだ。だからホールデンは西部へ一人無謀な逃避行をすることを取りやめた。そして「気高い死」を選んだシーモアは、後期の作品群でグラス家の人々にとっての精神的支柱としての役割を果たし続けたものの、サリンジャーが自ら生きる道としては選ばなかった。その代わりに彼は「卑小な生」を生きるバディーを自らの分身とした。やはりフレンチもまた自分の知識や思い込みからサリンジャーの心的状況を判断するという「心の読みすぎ」という過ちを犯したのではないだろうか。

## 結論

本稿では、まず「心の理論」、ワーキングメモリ、そして実行機能について説明し、「心の理論」はワーキングメモリや実行機能と連携して機能していることを示した。人が、他者が考えていることや感じていることを推測するにはこれらの機能がうまく働いている必要がある。もしそれらがうまく機能しなければ、他者の心を読み違えてしまう、前原の言う「心の読みすぎ」という現象が起こってしまう。

『ライ麦畑』におけるホールデンとアントリーニのやりとりには、「心の読みすぎ」現象が見られ、それがもつて二人は互いを誤解し合ってしまう。アントリーニにホールデンに対する性的な意図があったのかどうか、そしてアントリーニの助言はホールデンを救うことにつながったのかどうかという問題については批評家の間で大きく二つに意見が分かれるところであり、本稿ではこの二点について解釈をした。

アントリーニの性的な意図については、客観的な描写が乏しく、意図があったとは言い難い。ホールデンがそれまでに何度となく受けた性的被害という文脈から、アントリーニの行為を誤解した可能性が高い。自分がかつて性的被害を受けたという、自分しか知らない事実をアントリーニも知っているという前提で、アントリーニの心的状態を読んでしまっている。つまりホールデンは「心の読みすぎ」の過ちを犯してしまったのだ。それに加えて、彼がアントリーニを性的な加害者と考えた背景には、自分の様々な個人的な問題を鋭く指摘されてしまったことへの反発もあったのだと考えられる。

そしてアントリーニが引用したシュテーケルの言葉がホールデンを救ったのかどうかという問題については、作品のエンディングを考慮すると、救いとなったと考えた方が理に当たっていると結論せざるを得ない。フレンチは、読者が、シュテーケルの言葉に価値を置くあまりホールデンの心理を読む際に「心の読みすぎ」の過ちを犯してしまうのだと主張する。確かにそれは鋭い指摘ではあるものの、作品のエンディングを見る限り、ホールデンはシュテーケルの言葉を受け入れたと考える方が自然ではないだろうか。フレンチは自身の説が正しい根拠として、

サリンジャーの後期の作品群におけるシーモア・グラスに言及するが、これは完全にフレンチによる「心の読みすぎ」ではないかと考えられる。

〔注〕

- (1) Premack and Woodruff (1978)
- (2) 前原 (2014: 13)
- (3) 前原 (2014: 13)
- (4) 前原 (2014: 15)
- (5) 前原 (2014: 3)
- (6) Salinger (1951: 242)
- (7) Salinger (1951: 56)
- (8) Salinger (1951: 175)
- (9) Salinger (1951: 165)
- (10) Salinger (1951: 244-245)
- (11) Salinger (1951: 249)
- (12) Salinger (1951: 249)
- (13) Salinger (1951: 249-250)
- (14) Salinger (1951: 251)
- (15) Salinger (1951: 251)
- (16) Alsen (2002: 58)
- (17) Bryan (2000: 47)
- (18) Hutchinson (1998: 163)
- (19) Pinsker (1993: 85-86)
- (20) 高橋 (2006: 51)
- (21) Trowbridge (2000: 26)
- (22) 新田 (2004: 205)
- (23) 野間 (2003: 289)
- (24) French (1976: 113)
- (25) Salinger (1951: 298)
- (26) Salinger (1951: 249)
- (27) Salinger (1951: 253)
- (28) French (1976: 110)
- (29) Salinger (1951: 165)
- (30) アメリカ北東部の名門8大学、ハーヴァード大学、イエール大学、コロンビア大学、プリンストン大学、ブラウン大学、ペンシルヴェニア大学、コーネル大学、ダートマス大学を指す。
- (31) French (1976: 113)
- (32) French (1976: 113)
- (33) French (1976: 113)
- (34) French (1976: 113-114)
- (35) Salinger (1955: 130-131)

〔引用文献〕

- Alsen, Eberhard. *A Reader's Guide to J. D. Salinger*. Westport: Greenwood Press, 2002.
- Bryan, James. "The Psychological Structure of *The Catcher in the Rye*." *J. D. Salinger's The Catcher in the Rye*. Ed. H. Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2000. 31-50.

- French, Warren. *J. D. Salinger*. Boston: Twayne Publishers, 1976.
- Hutchinson, Gregory. "The Role of Mr. Antolini in Salinger's *The Catcher in the Rye*." 『東京家政大学研究紀要』 38 (1998): 161-169.
- Pinsker, Sanford. *The Catcher in the Rye: Innocence Under Pressure*. New York: Twayne Publishers, 1993.
- Premack, David, and Woodruff, Guy. "Does the Chimpanzee Have a 'Theory of Mind?'" *Behavioral and Brain Sciences* 4(1978): 515-526.
- Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye*. Boston: Little Brown, 1951.
- Salinger, J. D. "Seymour: An Introduction" *Raise High the Roof Beam, Carpenters and Seymour: An Introduction*. Boston: Little Brown, 1955. 109-248.
- Trowbridge, Clinton. W. "The Symbolic Structure of *The Catcher in the Rye*." *J. D. Salinger's The Catcher in the Rye*. Ed. H. Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2000. 21-30.
- 高橋美穂子. 「アントリーニ先生再考」. 『シリーズ もっと知りたい名作の世界④ ライ麦畑でつかまえて』, ミネルヴァ書房, 2006: 47-61.
- 新田玲子. 『クラフツマン・サリンジャーの挑戦 サリンジャーなんかこわくない』. ミネルヴァ書房, 2004.
- 野間正二. 『『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の謎をとく』. 創元社, 2003.
- 前原由喜夫. 『心を読みすぎる一心の理論を支えるワーキングメモリの心理学』. 京都大学学術出版会, 2014.

(もちどめ こうじ 英米学科)

2017年11月15日受理